

指導資料



鹿児島県総合教育センター
令和2年10月発行

複式教育 第60号

対象
校種

小学校 中学校
義務教育学校



予測困難な時代を生きる子供たちを育てる複式学習指導 —自ら学び自ら考えるガイド学習への転換—

ガイド学習は、複式学級における学習指導で最もよく行われている指導方法である。しかし、その目的や意味を十分把握しないまま指導しているケースが少なくない。本資料では、複式学級の学習指導を単式学級のそれに近づけていくという考え方から脱却し、新しい時代に生きる子供を育成するための複式学習指導について、ガイド学習の考え方やその指導を実現するための要点を具体的な例を踏まえながら提案する。

1 はじめに

人類にとって大きな変革の時代が訪れていると言われて久しい。いわゆる Society5.0 時代の到来である。その時代に生きる人材の育成に向け、平成 29 年の学習指導要領の改訂では、資料 1 のように、教師主導から子供主体の学習、主体的・対話的で深い学びが望まれている。

資料 1 学習指導要領（平成 29 年公示）の全体像



これは、科学技術やグローバル化の進展等により急速に社会構造が変化する予測困難な時代に生きていくためには、既習の知識を駆使するだけでなく、自ら考えること、そして自ら困難に立ち向かうべく学び続けることが必要とされるからである。

そのため、毎日の授業においても、これま

で以上に子供が自ら学び自ら考える学習を実現できるようにする必要がある。自ら学び自ら考える学習とは、学習の主体が子供であり、子供一人一人が学びに向かい、子供一人一人が考える学習である。鹿児島県下の複式学級を有する多くの学校で取り入れられている学年別指導では、ガイド学習を行っているところが多い。ガイド学習とは、複式学級における学習形態の一つで、間接指導の際、教師の指導の下、子供の中から選ばれたガイド（学習の案内役）を中心に、学習進行計画に従い相互に協力し合い、助け合いながら学習を進める学習である。ガイド学習のよさとしては、次のようなものがある。

- ① 教師が直接指導できない時間帯が多いため、子供自ら学習を進める必要がある。そのため、学習の手順や学び方を掴ませることが重要であり、子供に主体的な学習態度を養いやすい。
- ② 少人数集団による学習になるため、人数が多い単式学級に比べ、個人の考えを発表したり、それを基に話し合ったりしやすく、子供一人一人の考えを広げたり、深めたりしやすい。

このように、ガイド学習は子供一人一人が自ら学び自ら考える授業を行っていく上で、より効果的な学習方法であると言える。そのため、これまでのガイド学習の考え方、進め

方を土台に、子供一人一人がより自ら学び自ら考えるための視点を踏まえながら授業づくりをすることが重要である。

一方で、ガイド学習の難しさがある。片方の学年に、教師が物理的に半分しか関わることができないことから、学習問題から焦点化して学習課題をつくったり、子供一人一人の考えを強固・付加・修正するために互いの考えを共有したり、全員で学習のまとめを創り上げたりするなど、いわゆる「深い学び」に子供たちだけで至ることが難しい。

そこで、次のような考え方の下、自ら学び自ら考えるガイド学習を考える必要がある。

2 自ら学び自ら考えるガイド学習の基本的な考え方

(1) 考え方①「子供たち自身による学習」の実現

授業は子供のものである。Society5.0時代における授業は、教師が効率よく教授することを目指すのではなく、子供が自分の学びを実現できるようにすることが望まれる。そのため、子供自身が学習に目的や必要感をもてるよう工夫しなければならない。

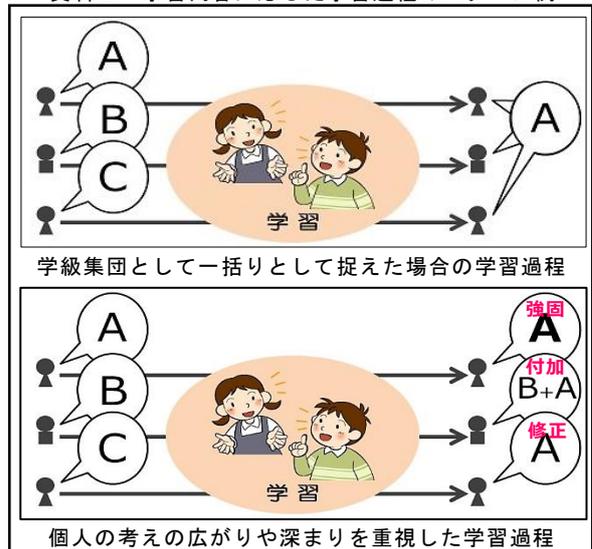
その際、教師のスタンスは、指導者（教える人）からファシリテーター（進行する人）、コーディネイター（調整する人）へ転換する必要がある。授業中はできる限り子供の学習に積極的に介入しないのが理想であると考えられる。つまり、授業前に子供の考えを十分に想定しながら、子供たちが自分たちで学習を進められるよう準備を入念にする必要があると言える。

(2) 考え方②「子供一人一人のための深い学び」の実現

授業は学級集団全体のためであること以上に、子供一人一人にとって有益なものでなくてはならない。つまり、「子供たち」として学級集団として一括りに捉えるのではなく、子供一人一人にとって主体的・対話的で深い学

びにならなければならないと考える。そのため、資料2の下段のように、学習の前後における個人の考えの広がりや深まり、いわゆる考えの変容（強固「やっぱり～でいいんだ。」・付加「～もいいな。」・修正「～の方がいいな。」）が明確になる授業が望まれる。

資料2 学習内容に応じた学習過程のパターン例



3 自ら学び自ら考えるガイド学習の要点

基本的な考え方を基に、子供が自ら学び自ら考えるガイド学習の要点について、次の3点を挙げる。

(1) 子供の自然な学びの実現を目指す学習過程

複式学習指導では、「わたり」、「ずらし」はつきものである。しかし、これらは子供の学びのためというより、教師の効率的な指導を行うためであるとも考えられる。子供の学びの自然な流れで授業づくりをするのであれば、計画的な「ずらし」よりも、子供の学びの流れの中で「ずらし」が生じていくのだと考えるのが自然である。さらに、子供が自ら学んでいく中で困難が生じた際に教師が関わられるような状況が、画一的・予定調和的な教師の「わたり」はなくなると考える。

そこで、資料3のような、両学年の学習内容の「ずらし」を設けず、子供の学びの自然な流れが実現できる同時導入・同時終末の学習過程で授業設計をする。

資料3 子供の学びの自然な流れが実現できる学習過程例

主な学習活動（第1学年）		教師の位置	主な学習活動（第2学年）	
1 前時を振り返り、学習課題を確認する。 はなの いっぼんみちが できるとき、どうぶつたちはどんな はなしを しているのかな。		みつかむ・みとおす	1 前時を振り返り、学習課題を確認する。 大きなさかなを おいだしたばんで、スイミーに いったげたいことは なにかな。	
2 学習の進め方を確認する。			2 学習の進め方を確認する。	
3 動物たちの会話を想像する。 (1) 書き方のモデルを基に、動物が話をしていることを想像して小黒板に書く。 「〇がいました。『～。』という形で、文を書くんだね。 (2) 書いたことを発表し合う。 くまさんが言いました。「袋の中には、花の種がはいっていたんだね。」 かえるさんが言いました。「春になって温かくなって、オタマジャクシもでてきたよ。」 りすさんが言いました。「くまさんのおかげで、きれいな花が咲いたね。」		みつかむ・みとおす しらべる・ふかめる	3 スイミーたちの言動についての感想をもつ。 (1) 書き方のモデルを基に、自分なりの感想を小黒板に書く。 スイミーたちに言ってあげたいことと、どうして言いたいかの理由を書くのね。 (2) 書いたことを発表し合う。 スイミーが小さい魚たちに、いろいろのことを言うところが好きだな。どうしてかと言うと、スイミーが一生懸命だったからだよ。 スイミーたちが力を合わせて、大きな魚を追い出すところがいいな。どうしてかと言うと、四の魚みたいになって泳げるようになったからだよ。	
4 動物たちや場面の様子を話し合う。 動物たちはどうして喜んでるのかな。 【叙述から】 ・「あたたかいかげ」 ・「はなのいっぼんみち」 【挿絵から】 ・動物たちの表情 ・野原の様子 春になって、花の一本道ができたから、動物たちは喜んでるんだね。		しらべる・ふかめる	4 場面の様子について話し合う。 どうしてスイミーは目になろうと言ったのかな。 どうしてスイミーたちは、大きな魚を追い出したのかな。 黒いスイミーが目になることで、本物の魚に見えるようになって考えたからだよ。(スイミーの知恵) 「あさ」も「ひる」も泳いで、大きな魚を驚かせたからだよ。(スイミーたちの協力) スイミーの知恵とみんなの協力のおかげで、大きな魚を追い出すことができたんだね。	
5 話し合ったことを基に、学習のまとめをする。 「はるが きて、はなの いっぼんみちが できてうれしだね」と、はなしを している。		ふりかえる・いかす	5 話し合ったことを基に、学習のまとめをする。 スイミーの考えをきいて、みんなが力を合わせたから、大きなさかなをおい出したことに、びっくりしたよ。	
6 紙芝居を仕上げ、発表会に向けて練習する。 ・動物が話をしていることを書き入れる。 ・挿絵に色を塗る。 ・音読の練習をする。			6 紙芝居を仕上げ、発表会に向けて練習する。 ・自分の感想を書き入れる。 ・挿絵を描く。 ・音読の練習をする	
7 本時の学習を振り返り、自分や友達よかったところを発表し合う。 場面が変わっても、やっぱり動物が言ったことを考えると、楽しく読めるな。(強調) 友達の発表の仕方が、声が大きくていいな。僕も今度は大きな声で発表したいな。(修正)		ふりかえる・いかす	7 本時の学習を振り返り、自分や友達よかったところを発表し合う。 △さんが発表したことを、わたしの紙芝居にも入れてみたいな。(付加)	

【ポイント①】2学年の学習過程を合わせる。

子供の学びの自然な流れを尊重するために、両学年共に問題解決的な学習の流れで学習過程を構成する。そのため、教師は子供の学習全体を俯瞰し、コーディネートに徹する。例えば、全体的な指示はガイドが行い、教師が個別指導をするなど、いわゆる個から個への「わたり」を行う。また、学習課題を立てる場面や子供たちが到達したまとめを確認する場面に教師は関わるようにし、それ以外は子供の困り感や必要感に即して臨機応変に関わるなど、「わたり」の計画を決めすぎないことが重要である。

【ポイント②】2学年の学習内容や領域を合わせる。

教室という学習空間では、同じ目的で学習を進めることで、学びに向かう一体感を醸成しやすく、学年間で交流がしやすくなる。例えば、国語科で同じゴールの言語活動を設定し、途中で学年相互にアドバイスできるようにしたり、学習の振り返りで学び方などについて相互交流することで新たな学び方に気付かせたりすることが考えられる。また、両学年共に同じ時間帯に大体同じ学習内容に取り組んでいるため、教師は対応しやすい。

※ 筆者の実践（H23 鹿児島大学教育学部附属小学校）を基に作成

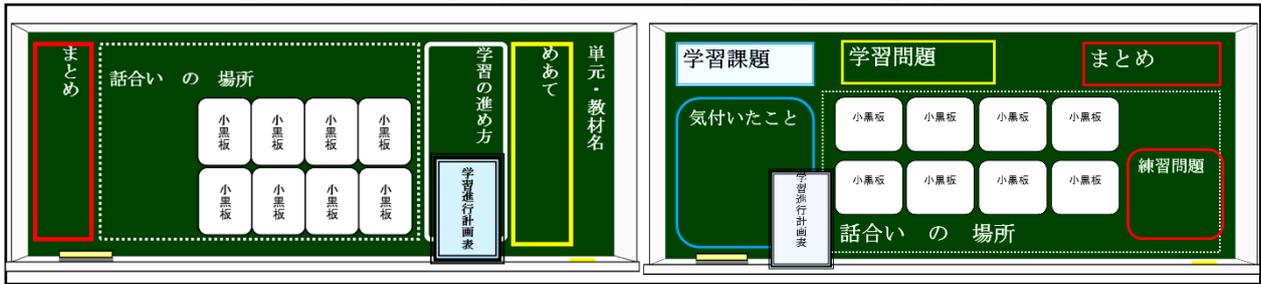
(2) 思考の可視化

板書は子供の思考の流れを可視化したものであると言われる。そこで、資料4のように、各教科等の授業の流れを板書として画一化して学習をルーティン化することで、子供は思

考しやすくなり、自分たちで授業を進めやすくなる。また、教師にとっては、各学年の授業の進捗が分かりやすくなり、子供の困った状況に即した指導がしやすくなる。



資料4 板書として授業の流れを画一化して思考の可視化を促す手立て例（左：国語科，右：算数科）



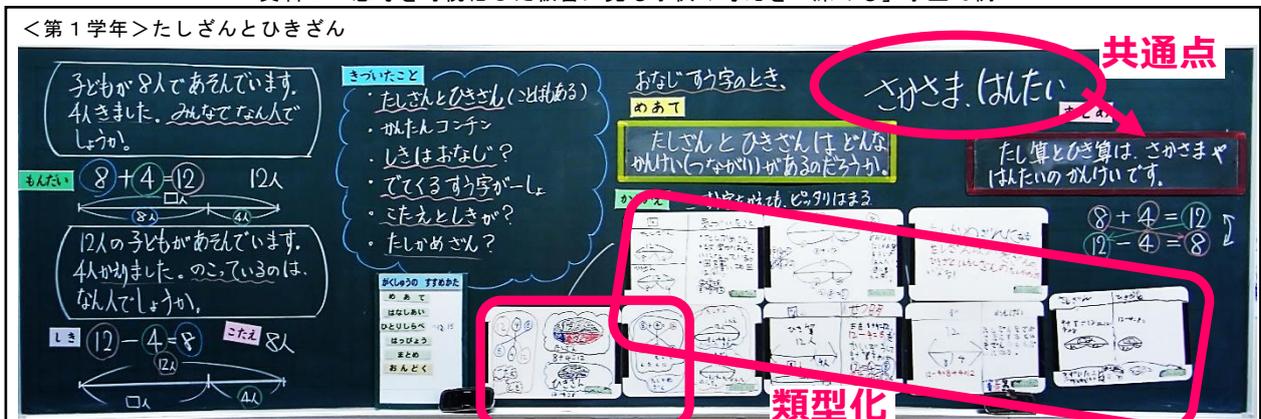
(3) 考えを「深める」手立て

子供たちに学習を委ねると、自分の考えを発表しただけで深まりのある話し合いにならない、話し合いで交流したことを自分の考えに生かせないなどの課題が少なくない。そこで、子供一人一人の深い学びにするために右のような手順で話し合わせる。

- ① 最初の自分の考えをもつ。
- ② 自分の考えを発表し合い、**情報共有**をする。
- ③ ②を生かし、**最終的な自分の考え**をもつ。

さらに、上記の手順で学習を進めるために、資料5のように、個人の発表ボードを有効に活用させることが重要である。

資料5 思考を可視化した板書に見る子供の考えを「深める」手立て例



【ポイント①】最初の自分の考えには、理由を書かせる。

結果としての自分の考えだけでなく、その理由を書かせることで、子供は自分の思考経過を可視化することができる。また、理由に教科特有の見方・考え方が内在されていることが多いため、子供が見方・考え方を意識できるようにし、次の学習に生かせるようになる。

【ポイント②】自由に学習させる。

追究の仕方や学び方などを自由にすればするほど、子供の思考は限定されにくくなり、自分自身で学習を工夫しようとするため、思考が深まりやすくなる。そのため、教師は必要最小限の指示に留め、追究の仕方などについて詳細に決めない方がよい。

【ポイント③】考えを類型化して共通点を見だし、学習のまとめを導き出させる。

それぞれの考えを理解し、共有させるために、出された考えを類型化させる。さらに、どの考えにも共通することを探することは、学習課題を解決するための見方・考え方を見いだすこととなり、概念的な考えを構築する際の橋渡しとなる。

－主な参考文献－

- 長崎・鹿児島・琉球3大学連携研究編集委員会編「複式学級指導法－単式学級内の学力差に対応した現場の工夫にも役立つ指導法－」2009，東京教学社
- 広島大学附属東雲小学校著「複式ハンドブック－異学年が同時に学び合うよさを生かした学習指導－」2010，東洋館出版社
- 石川雅仁著「異年齢集団におけるかかわりを重視した複式国語科指導の在り方」2010，鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要
- 鹿児島大学教育学部附属小学校編「研究紀要（複式教育）」平成23年
- 大島教育事務所編「大島の教育 Pamphlet 5『かけがえのない仲間と学ぶ（複式教育）』」平成28年
- 奈須正裕著『「資質・能力」と学びのメカニズム』2017，東洋館出版社
- 苫野一徳著『「学校」をつくり直す』2019，河出書房新社

4 おわりに

自ら学び自ら考える複式学習指導について述べてきたが、これらの考え方や要点は、単式学級の学習指導にも通じる。複式学習指導を経験することを前向きに捉え、自分自身の授業観ひいては教育観についての刷新を図るきっかけにしてほしい。